



こころ

スクールカウンセラー

吉澤克彦

令和3年3月

常に変化する世の中と自分



ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず。

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

これは、有名な古典、鴨長明の『方丈記』の冒頭です。1212年成立。

訳は、「川の流れば絶えることはないが、そこを流れる水は同じではない。よどみに浮かぶ水の泡は、消えてはまた生まれ、長い間とどまる例はない。」すべてのものは、移り変わる（無常）という思想を川の流りに例えています。

彼の生きた時代は、飢饉、疫病の流行、大地震などの天災、政治の転換など、人々が翻弄された時代でありました。今と類似した部分が多いその時代に、流されることなく自分を見つめて生活した鴨長明の生き方に共感する部分が多いからか、コロナ禍での生き方のヒントを得たいがためか、今また『方丈記』が読まれています。

今回の「こころ」は、国語の教師でもある私から卒業生と、そして進級する皆さんに『方丈記』の冒頭から想起したことをふたつ、お話しします。

ひとつは、「ゆく川の流れ」を世の中ととらえること。常に変化するということです。

この世界に絶対不変ということはない、絶対に正しいもないのです。逆に、今まさに困難のまっただ中にいて辛く苦しくても、それが未来永劫続くものではない。もし、今が不調、そして逆境でも、超えられない、立ち直れない、取り戻せないということはないのです。

二つ目は、「とどまりたるためしなし」を成長する自分自身だと考えます。

昨日と同じ今日の自分、今日の自分と全く同じ明日の自分はないのです。

停滞したままという例はない。自分自身も変わり、今の状況も、自らの手で変えられると信じることです。成長を信じることで、一時枯れかけた川の流れ、濁流となった流れでさえも、必ず豊かな流れを取り戻し、さらなる清流へと転換することができるはずです。

清らかで心豊かに、それぞれが自分らしい未来を獲得することを祈念します。

コラム：松尾芭蕉 他者への関心と内面

中3、高1の「奥の細道」の授業の終末で、芭蕉最晩年の名句「秋深き隣は何をする人ぞ」を扱いました。「深き」は連体形で名詞などにつながる形。これは最初「秋深し」であったものを「深き」に芭蕉自身が修正したもの。「隣は何をする人ぞ」（周りを気にし、他者への関心を示す）につながる思いを踏まえ「秋深き」の後にどんな語句を思い浮かべますか？という授業でした。

例えば、紅葉、軒、夕焼け、竈の匂い、虫の声、静寂、ぬくもりなど五感でとらえた語句や病床、不安、人恋しさ、夢など状況や心情を表す言葉を生徒それぞれは「秋深き」の後にイメージし、「隣人に関心を示し晩秋の庭先に目をやる芭蕉」や「親しい人を思い落葉の山道を旅する芭蕉」、「病や老いへの不安抱きながら人とのつながりを求める芭蕉」などを想像し句を鑑賞しました。これらは表現に注意を払い、自らの生活体験や言語感覚から句のイメージを広げ、情景や心情を想像する試みです。授業では想起した語句とその理由を周りの生徒と語り合う「隣は何」（教室内の他者）を意識する時間もありました。コロナ禍の中、仲間同士の交流が十分できなかった今年度は、「隣は何？」の感覚というのは、中・高校生にとって、とても共感できるのだったのではないのでしょうか。